

現代の都市居住における父親の居場所に関する研究

－ 柏市を事例として －

Keywords

現代居住 居場所 なわばり学
住宅 地域 父親



AK13061 高田 菜生

1. はじめに

1.1 研究背景

人間は、物理的に存在できても、自分の存在が保証される居場所、誰かに必要とされる居場所がないと生活に困難をきたすと考えられる。

現代では、自宅とそれを囲む地域によって構成される地域社会と、依然として母親より家計責任の重い父親の職場とが離れた都市でのくらしかたがある。こうしたくらしでは、父親たちは、ほとんどの時間、不在であった居住空間で自分の居場所を持つことは困難ではないだろうか。本研究で着目する中壮年期にあたる父親たちは、現在、子育てがひと段落し、定年退職について考え始める頃である。かれらは、退職後に、会社以外での人間関係が築けずに家庭や地域社会に対して関わりが希薄であると、孤立にむすびつきやすいと想定される。

家族生活の基本となる自宅内には、戸建集合にかかわらず、積極的なプライバシー確保をめざしたnLDK思想が根強くはびこっている。しかし、現代では、家父長制の薄まりや母子密着の高まりによって、自宅は父親だけのものではない。また、全国的にみても地域活動に参加することに意欲はあるもののなかなか踏み出せない父親、男性たちがいることが知られている（平成16年国民生活白書）。こうした状況において、都市居住における父親の居場所に目を向けることは急務だと考えられる。

1.2 研究目的

本研究では、自らが居住する地域で活動のデビューを果たした父親たちに着目する。かれらの、家庭や地域社会との関わり方を分析し、居場所を取捨選択する様相を分析する。そして、父親たちの住宅内外での居場所を明らかにし、その傾向を探ることを目的とする。

1.3 研究方法

千葉県柏市で2016年8月から9月の約10日間に調査をし、加えて10月に補足調査をおこなった。柏市大学連携会議に参加し、街に開いた活動団体をあつめた。そして戸建住宅、集合住宅に在住する父親（調査日現在、壮年期の者6件、中年期の者12件、高年期の者14件）へのインタビュー調査32件、24軒の住宅で可能な範囲での実測調査を実施した。

1.4 調査対象について

1.4.1 現在の父親をめぐる問題系

現代の都市居住における父親たちは、家庭や地域社会との関わりが疎遠である。それは母子密着を強めることにつながり、居場所をつくることをますます困難にしている。

(i) 父親の不在と母子密着による父親の孤立

共働きが主流となった現代、男性には、実質的に「仕事をしない」という人生の選択肢がない。特に壮年期後半からこどもの手がかからなくなる年齢になっても、妻の就業形態がフルタイムではなくなる傾向にあるいっぽうで、父親は働きに出つづける。よって現代の都市居住における父親は、実質的には郊外居住地よりも都市部で過ごす時間が長い。その反面、家庭では母子間の密着が強まるのである。

(ii) 父親の生活の傾向

宮脇(1998)によれば、平日と休日を併せて考えた「起きていて家にいる時間」[宮脇 1998, pp.153]の平均は男性が女性の半分以上の4.5時間である。さらに、男性は家にいるあいだ、TVをみている時間が多くを占める傾向にある。

(iii) 父親の地域社会での生活と人間関係

近年、「昼間地域社会にいない」人が増加している。「社会集団の中で友人や仲間等とほとんどあるいは全く過ごさない人の割合」では日本人男性が世界第1位となっている。今まで父親は、家庭や地域社会で人間関係を構築する時間を持つことは困難であった。今後、家庭や地域社会と関わりを持ちたくても、即座には対応できない可能性がある。

(iv) 父親の今後予期される展開—退職—

水無田や宮脇によれば、現役時代に自宅や地域に長時間不在であった父親たちには、退職後に「濡れ落ち葉」として扱われたり、「定年離婚」に陥ったりする可能性がまちうけているという。

(v) 父親の今後予期される展開—加齢—

加齢とともに社会の中で重点を置くべき対象が変化する。高年期の準備段階である中年期は、家庭や職場のみならず、地域にも目を向ける必要性がある。

1.4.2 柏市の概要

柏市は千葉県の北西部に位置する。昭和30年代の高度経済成長期以降、都市における人口膨張はとどまることを知らなかった。したがって、東京から30km圏内に位置する柏市のような都市近郊においては、衛星都市としての発展がみられた。就寝のためだけに帰るいわゆるベッドタウン化が著しく進んだ。昨今では、高齢化や空き家の増加が加速する傾向にある。



図1 柏市 地図 [柏市都市計画マスタープラン、pp. 1]

1.4.3 「オヤジ☆イノベーション」事業

柏市地域づくり推進部地域支援課と市民が企画運営する、壮年期からの居住地域での活動参加、いわゆる地域デビューの促進を目的とする事業である。街に開かれた父親たちの活動団体が集合して、柏市の駅周辺でイベントをおこなっている。イベント以外では主に柏市在住男性たちの地域活動を掲載した「柏おやじ図鑑」作成等をおこなっている。本研究では、このような地域活動の内容や参加したきっかけを中心にインタビューした。

2. 既往研究の検討

2.1 なわばり学

小林(2013)によれば、住宅内のしつらえをだれが決めているか知ること、なわばりの様態を知ることができる。以下①～⑥は小林の分析による空間及び家族の支配のあり方を示す。

- ① 父主導型:家の大部分を父親が支配するタイプ。
- ② 準父主導型:家長の場としての座敷を父親が支配し、ほかは母親が支配するタイプ。
- ③ 役割分担型:主に母親が中心に支配し、父親が従の意見者として登場するタイプ。
- ④ 母主導型:家の大部分を母親が支配するタイプ。
- ⑤ 平等型:父母が相談してしつらえを決定するタイプ。
- ⑥ 主夫型:そうじもしつらえも父親がおこなうタイプ。

本研究では、以上を援用し、居場所の形成要因を確認する。

2.2 居場所

都筑(2011)によれば、居場所は物理的側面に加え、社会的・心理的側面も伴う。したがって、対象者の人生の背景も把握したうえで特定の空間に特定の人がいるための建築的操作を探ることが必要とされる。また、前納(2000)と中島ら(2007)の定義から、居場所を社会的居場

所(他者との関わりをもつことで自分を確認できる居場所)と個人的居場所(他者との関わりから離れて自分をとりもどせる居場所)[中島ら 2007、pp. 95]にわけて分析し、居場所の物理的・心理的側面を把握する。これまでの建築学における父親の居場所に関する研究では、住宅内の使われ方に集中して分析されてきた。本研究では、地域社会全体で分析するが、すでに地域で居場所を見つけている地域デビュー者に着目し、住宅内外の居場所を分析する。さらに、水無田によれば、現代の男性たちは就業以外の社会参加への乏しさから家庭や地域との関わりが希薄になり、孤立に導かれる関係貧困となり、居場所を失う。このことから、居場所の社会的側面についても分析をおこなう。

3. 父親の生態

3.1 時間のつかいかたの分析

北浦(1992)と宮脇の分析をもとに、父親たちの時間の使い道を知るために、おおよその起床在宅時間(24時間のうち起きていて家にいる時間)や家族との行為・場の共有時間を計算した。加えて起床在地域時間(24時間のうち起きていて地域にいる時間)、通勤時間や地域活動時間も平均して計算した(表1)。

表1 年齢層ごとの各平均時間

単位:時間		壮年期:25-44歳	中年期:45-64歳	高齢者:65歳-			
				再就職		リタイア	
				現役時代	現在	現役時代	現在
平均起床在宅時間	平日	3.95	4.76	4.5	6	3.07	7.38
	休日	6.33	11.25	18.5	7	12.14	7.38
平均起床在地域時間	平日	1.33	1.78	0.33	0.33	1	9.48
	休日	9.07	5.89	0	9	4.07	9.48
平均通勤時間	平日	2.11	2.32	3	3.5	3.14	0
平均地域活動時間	平日	0.67	1.1	0	0	0	5.94
	休日	2.98	2.54	0	5.5	2.43	5.94

父親は現役時代の平日に、労働基準法に定められている勤務時間の半分にあたる約4時間しか居住空間にいない。休日は再就職者以外が地域活動をすることで住宅より地域にいる。高齢者は、現役時代より現在のほうが在宅・在地域の時間が長い。リタイアした者は平日休日の区別なく、地域活動に長く励むことがわかる。

3.2 家族との関わりかた

宮脇は、男性は起きて家にいるうちのほとんどを、TVをみて過ごしていると述べたが、この分析からは、TV視聴以外にも、こどもの住環境の安全性を高める地域活動をおこなうなど、家族と行為・場を直接共有せずとも、家族のために行動する場合がある。地域社会との関わりを通して、家族との関係を築く可能性がある。

3.3 父親の意識

中壮年期の父親は、家庭に対しては妻子のための役割を第一に考えるものの、それを果たすタイミングは妻子の緊急的・人生の節目である。地域社会に対しては地域活動に参加することで人間関係を築く傾向がある。とくに中年期の場合、果たせる範囲でできることをする傾向がある。高齢者の父親は、こどもが独立した年齢層にあたり、自身のこどものみならず、他者のこどもに視野を広げる。また、これまでの人生を振り返り、反省の念から、主夫としての役割を担う場合もある。地域社会に対しては、家庭での役割を終え、人と付き合うことやこれまでの住環境に対する恩返しの意図がみられた。

3.4 地域社会との関わりかた

退職前の父親は、平日に地域活動に参加する例はまれで、夕方から飲み会を開催する程度であった。しかし、中壮年期や退職後の高齢者は、地域活動時以外でも交流がみられた。

3.5 個人のライフヒストリー

生活のリズムや父親の意識、父親としての役割などが、加齢により変化するもしくは年齢層によって違いをもたらすことが改めて確認できた。それらを以下にまとめる。

- ・こどもの成長：父親の果たすべき役割の対象者が、こどもの独立前後で自分のこどもから他者のこどもを含むようになる。また、こどもの手がかかる時期か否かで、父親の生活リズムに影響を及ぼす。
- ・退職：退職前は妻子と過ごす時間をつくりにくく、単独行動をせざるをえない傾向にある。退職後は、こどもは独立しており、時間をつくるのが容易である一方、自発的に単独行動をする傾向にある。
- ・平日と休日：同じ「平日と休日」であっても年齢層によって、時間のつかいかたや時間に対する意識が異なってくる。
- ・地域デビュー：地域活動に参加することで、活動時や活動時以外であっても活動参加者との交流が生まれ、時間のつかいかたが変化する。また、父親の役割を、地域社会で果たそうとする場合が出てくる。

4. 空間の支配

4.1 父親の自室の存在

従来のnLDK住宅研究で着目されたのは、父親の自室があるいっぽう、自室を持たない母親の居場所である。

本研究の調査結果からも、とりわけ父親よりも母親は居室を持たない。しかし、父親が居室を持つことは心理的側面で居場所を持つことになっているのだろうか。

4.2 なわばりの視点

小林のなわばり学を援用し、しつらえの決定やそうじをする担当を分析して、結果を以下の表2に年齢層別に分類した。

表2 家族による空間の支配のタイプ分け

タイプ	父親の年齢層			計
	壮年期	中年期	高年期	
母主導型	(17)(23)	(20)(26)(32)	(1)(2)(3)(4)(5)(7)(11)(13)(25)	14
父主導型	(24)(30)	(9)(28)	(6)(8)	6
主夫型	0	(24)(27)	0	2
準父主導型	0	0	0	0
役割分担型	0	0	0	0
平等型	(18)(21)	(4)(13)(19)(21)	(10)(12)(16)	10
計	6	12	14	32

支配のタイプ分けについてみると、母主導型すなわち、自室を持たない母親が主導権をにぎるが最も多い。以降、この母主導型に着目して分析する。

4.3 調査事例からみる居場所のありかたゆくえ

父親が自室・自分専用の空間を所持しているか否か分類し、各事例の居場所を以下のように分析した。ここでは、自室や自分専用の空間を持たない壮年期の父親の事例(図2)について、本人が居場所がなくなることを予測、発言したことも含め、説明する。

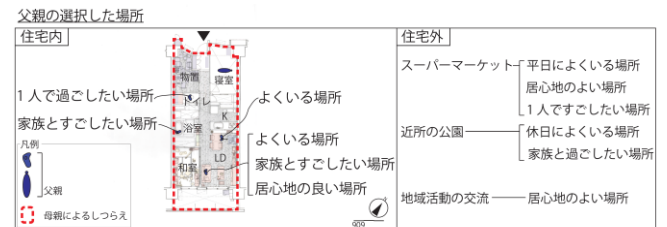


図2 事例における父親が選択した場所

この家庭では妻がLDでコミュニケーションすると決めたことにより、家族全員が自室を持たない。よって父親は1人で過ごしたい時にはトイレかスーパーマーケットを選ばざるをえない。父親が、トイレを居場所とすることを世間の父親の特権とし、特権に身を置きたがることから、トイレは空間に依存しない社会的居場所である。また、本人は「(今後、)居場所がないな」と思いながら家にいると思う」と発言した。すなわち、家庭内での社会的居場所がなくなるが、家に居場所を求めるのである。それに対して妻は「さっきから居場所なくなりそうとか言ってるけど(夫が)保険(を)掛けている」と指摘した。これに対して父親は夫婦関係を現状維持したいがために、実際に保険を掛けたことを認めた。この事例では母主導であり、その中で形成する居場所に関しては、家族との関わりが重要と父親が考えていることが示される。

5. 考察

5.1 現代の都市居住における父親の居場所の傾向

父親が母主導型の中で持つ自室・自分専用の空間は、父親の居場所に影響を及ぼす。以下の表3に居場所の傾向を示した。父親が自室・自分専用の空間を持つ場合は、関わり方の要求に対して空間を自由に選べる。父親が自室・自分専用の空間を持たない場合は、自室の代わりにトイレなどの個室、父親の特権などの空間に依存しない居場所を形成する傾向にある。また、母主導の家庭から

離れた結果として、自室・自分専用の空間の有無に関わらず、社会的居場所にあたる地域活動での交流や個人的居場所にあたる自然などの空間に依存しない居場所に補完される場合がある。また、同じLや自室、地域活動でも、各人による空間のとらえ方次第で、社会的居場所にも個人的居場所にも該当する。

表3 居場所の傾向

		本人の求める他者との関わり	
		家庭	地域社会
自室・自分専用の空間がある場合	社会的居場所	LやLDやLDK自体、Lのソファ・テーブル、自室	なし
	個人的居場所	飲食店、公園	地域活動での交流、テニスコート、アルバイト先、フィットネスクラブ、飲み会、菜園
	自室・自分専用の空間がない場合	自室、Lのソファ・TV前	なし
自室・自分専用の空間がない場合	社会的居場所	LやD自体、LやDのソファ・コタツ・テーブル、風呂、妻との晩酌、父親の特権	なし
	個人的居場所	公園、買い物、住宅付近	地域活動時・活動時以外での交流
	自室・自分専用の空間がない場合	トイレ、和室自体、Dの自席	なし
自室・自分専用の空間がない場合	社会的居場所	電車の中から見る景色	電車の中から見る景色
	個人的居場所		

5.2 個人のライフストーリーに対する居場所の変化や差異

3.5の個人のライフストーリーに平行し、居場所の変化や差異があらわれることがわかった。以下にその傾向を述べる。

・こどもの成長：こどもの独立前は、家族との関わりをかならずしも直接的には求めない。その反面、家族と行動せずとも、家族のために地域社会との関わりを求める社会的居場所、個人的居場所を形成する。独立後は、父親の役割から夫、男性、人間としての役割を第一とする考え方に移行する。また、これまでの人生を振り返り、反省の念として主夫の役割を担う場合もある。

・退職：退職前は、在宅時間が少なく、家族との関わりを求めるものの、持ちづらい傾向にある。退職後は、自宅内外で単独行動が自発的なものとなる一方、こどもが独立した頃のため、父親が自室を持つ。それは結果として、妻と別々の空間にいることを可能とし、互いを尊重して別々の生活を送る。そして、本人はモットーに沿った社会的居場所、個人的居場所を形成するようになる。

・平日と休日：壮年期の父親は在宅時間が少なく、家族との関わりを持ちづらく、行為は単独が多い。例えば平日の帰路で、一人でスーパーマーケットに立ち寄る。帰宅後に妻と晩酌をする社会的居場所の形成準備の単独行

動である。休日は、地域活動でこども向けイベント企画に参加し、地域社会と家庭のための社会的居場所を得る。

・地域デビュー：父親の役割の結果、居心地の良さや、家族との関わりを得られる社会的居場所へ発展する。また、デビューしたがボランティア活動が性に合わず、別のデビューを果たす場合がある。

5.3 父親の居場所の概念について

小林の分析では、居場所は空間を支配して形成するものである(図3左)。それに対し、本研究の分析結果から、居場所は空間の支配のみからなるとは限らないことがわかる。内的要因(父親の自発的意識)や外的要因(社会環境・状況、物理的要因、周囲の心理面や生理面)が根底にあると考えられる。そういった形成要因が居場所の物理的・心理的側面に影響する(図3右)。また、家庭から逃れるように地域社会に居場所が補完される可能性もある。

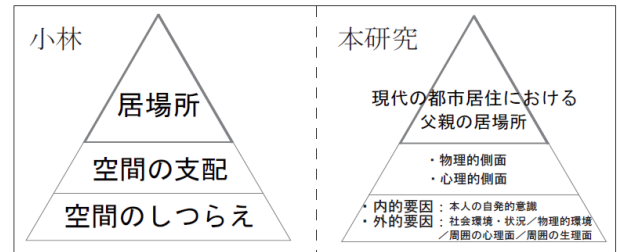


図3 小林と本研究の居場所の概念比較図

6. おわりに

現代の都市居住で父親は、関係貧困により居場所を失うとされる。本研究より、家族と直接的に関わらなくても自宅内外の空間や社会的地位で自身や家族のために居場所をつくる場合がある。居場所が住宅内には収まらず、住宅外に飛び出し、地域社会に補完される可能性がある。関係貧困とは限らず、父親には総合的に居場所があると言えよう。加齢後も居場所を保持するために、5.3で明らかにした外的・内的要因が重要となるだろう。

参考文献

- 1) 柏市史編さん委員会『かしの歴史—柏市史研究 第2号—』、柏市教育委員会、生涯学習部、2014年
- 2) 宮脇檀『男と女の家』、株式会社新潮社、1998年
- 3) 水無田気流『「居場所」のない男、「時間」がない女』、日本経済新聞出版社、2015年
- 4) 小林秀樹『居場所としての住まい』、新曜社、2013年
- 5) 都筑学「青年心理学から見た「居場所」の問題」、第19回(2011年)大会研究委員会企画シンポジウム記録、2011年
- 6) 前納弘武「夫の居場所」、『現代のエスプリ現代人の居場所』、pp.171-182、2000年
- 7) 中島喜代子、廣出円、小長井明美「「居場所」概念の検討」、『三重大学教育学部研究紀要』、pp.77-97、2007年